

出会いは世界を広げていく

交流会を通して

第3回

土肥いつき DOHI ITSUKI

京都の公立高校教員。24時間一人バレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

はじめての「場」づくり

5月号では、わたしの「人が集まる場」との出会いを書きました。今号には、わたしがはじめて「場」をつくる側になった経験を書こうと思います。

わたしがはじめて「場」をつくる側になったのは、おそらく大学生の時だったと思います。わたしが入学したのはキリスト教系の大学でした。理系が好きなのは、大学では工学部電子工学科に進学しました。ただ、入った瞬間に「間違えた」と思いました。理系が好きであることと、それを学問として学ぶことの間にある大きな違いを実感したのです。わたしは高校時代に合唱部に所属しており、大学でも続けたかったのですが、あまりにも勉強が忙しいので合唱部は断念し、代わりに電気研究会に入り、プログラムをつくりたりして楽しんでいました。また、大学の講義もなんとかついていけるように勉強もしていました。

しかし、それは1年生の間だけでした。2年生の夏休み、課題をするために祖父の家に居候させていただきました。当初は夏休みだけの予定でしたが、そのままずっと祖父の家に居続けました。それをきっかけに、わたしはどんどん大学の講義から遠ざかっていき、工学部の友だちとも疎遠になりました。また、電気研究会もやめてしまいました。こうして、わたしは大学の中に居場所をなくしました。

そんなわたしでしたが、再び大学の中に居場所を見つけることになりました。その最初のきっかけは、キリスト教の教会の青年会でした。たまたま一般教養の授業で出会って親しくなった他学部の友だちに、大学の系列のD教会の青年会に誘われました。わたしは他の教会に籍がありましたが、D教会の青年会に参加しはじめました。D教会の青年会は、「教会に批判的にかかわる」ことを標榜しており、かなり政治があったメンバーが多く、活動方針をめぐるメンバー間の衝突もありました。最終的には青年会は空中分解しました。しかし、そのような青年会に身をおくことを通して、他の教会の青年会の人々ともつながり、わたしの交友範囲はキリスト教の中に広がっていきました。

さらにわたしは大学内にもひとつの居場所を見つけました。それは、かつて断念した合唱を行う聖歌隊でした。わたしが入部した当時の聖歌隊は部員がほぼゼロの状態、唯一いた先輩は練習の日にひとりでオルガンを弾きながら誰かが来るのを待つという状態でした。そこでわたしは先輩から指揮者のポジションをもらい、ひたすら人集めをしました。人が集まったら、次は発表の場所の確保です。大学が行っている礼拝で賛美歌を歌えるように、宗教部につけあいました。このようにして、復活聖歌隊が結成されました。

そしてもうひとつ、これらをつなぐ大切な居場所を見つけました。それは、宗教部の建物の中にある「談話室」という部屋でした。当時誰も使っていなかった談話室にわたしは居座りました。そこにD教会の青年会や他の教会の青年会、そして聖歌隊のメンバーが入れ替わり立ち替わりやってきました。異なるいくつかのグループが「談話室」という「場」でつながり、人間関係や話題が化学反応を起こしていました。そしてその化学反応は、さらに他の人を呼び込み、談話室は多様な人が集まる「場」になりました。談話室のメンバーたちは、宗教部主催のキャンプにみんなで参加したり、聖歌隊の名前を使って学園祭に喫茶店を出したり、とにかく「おもしろいこと」をやりました。

あちこちに出かけていって、それぞれの場所にいる人をつなぐ「場」をつくる、今のわたしのやり方の原点は、この談話室にあったような気がします。わたしはそんな談話室の中では「中心」にはおらず、「周縁」にいたような気がします。また、そこで担っていた役割は、おそらく「触媒」だったと思います。

ただ、こんなことをしていたので、わたしは4年で大学を卒業できませんでした。大学5年になった時、同学年の人たちはみんな卒業してしまい、談話室からは人が消えました。わたしも教員採用試験や卒業のために勉強しなければならなくなり、談話室に行くこともなくなりました。そして翌年、わたしも大学を卒業し、現在の高校に赴任することになりました。